

## 追悼・間苧谷努先生

2002年3月22日 間苧谷 努 先生が天に召された。あまりにも突然のことであった。祭壇に掲げられた遺影に語りかける言葉を見いだせずただ茫然と立ちつくす参列者の姿が衝撃の大きさを物語っていた。特に経営学部スタッフは一週間前の教授会で熱く語っておられた姿を見ているだけに信じられないというよりもむしろ認めたくないという気持ちが強かったのではないだろうか。わたし自身がそうであった。しかし先生は逝ってしまわれた……。

わたしが 間苧谷 努 という名前を知ったのは『国民経済雑誌 稲葉襄博士記念号』（236巻5号、1977年）に掲載されていた論文「低成長経済下のイタリア手工業——手工業の停滞と政策転換——」であった。その時はもちろん同じ大学に勤務することになるとは夢にも思っていなかったが、何故か名前だけは記憶に残っており、後年初めてお会いしたときにその話をしたことを今でも覚えている。『稲葉襄博士記念号』に寄稿を求められたのは先生が43才の時である。このことからわかるように先生は中小企業論の分野では「若い」ときから注目されていた研究者であり、当時すでに「大きな」存在であった。特に「イタリアの中小企業」研究では自他共に第一人者としての評価を得てこられた。

先生は数多くの業績を残されたが、まず特筆すべきは、34才の若さで編者の1人として参加され共同執筆された『中小企業論』（初版1968年）の刊行であろう。これはその後も幾度となく版を重ね中小企業論講義テキストの「定番」となったが、それは同時に先生に学者としての名声を確立させる「きっかけ」となり、博士論文となった『中小企業政策論——イタリアにおける中小企業の現実と政策的対応——』（1970年）の出版へと繋がっていったのである。この研究者仲間に推されて公表された著作は刊行後すぐに学界において高く評価されるに至り、先生の名前が学界にあまねくひろまる契機となった「記念碑的な」作品である。その後先生は、業績目録からもわかるように、そこで提示された理論枠組みに従って自己の理論を深化させたりあるいは中小企業政策の現状を鋭く分析されていったのである。

先生は開設準備委員として奈良産業大学に赴任され、前任校の京都産業大学で経済学部長と経営学部長を歴任されたキャリアを活かして、大学の基礎づくりに邁進された。教務部長として、就職部長として、学部長として……。先生は大学のさまざまな制度の構築に努力を傾注されただけでなく、若手教員の啓蒙にも大きな役割を果たされた。我々の世代はまさにOJTで先生から大学教員としてのあり方を学んできたのだ。奈良産業大学創立にはさまざまな経歴の先生方が協力されそれぞれが多大な貢献をされてきたがそのなかでも一貫して私学で研究・教育・行政に携わってこられた先生の経験は極めて貴重であり、節目節目でのアドバイスに助けられた教職員は数多い。

少子化が進み大学が大きな転換期を迎えている現在、先生にもっとお聞きしたいことがあっ

たし、これからも「先生が生きておられたら……」との「嘆き」を漏らす日々が来ることであろう。奈良産業大学の「格」を高めることが残された我々の責務であろうし先生のご恩に報いる最大の途であることをいま改めて痛感している。

先生は一見すると「豪放磊落」のように映ったがその反面で非常に「寂しがり屋」でもあった。多くの人たちと食事をしたりアルコールを口にすることを好まれ、1人でも多くの人に参加されると満面に笑みを浮かべて歓待された。先生には人を惹きつける魅力があり数多くの人々が先生の研究室を訪ねた。研究室はいつも賑やかな話し声で満ちていた。そのような先生の人柄は正月と夏に自宅を開放して「パーティ」を開催されたことにもよくあらわれている。先生はそこでの「談笑」を心から楽しみにしておられたが、それだけでなく京都産業大学時代の教え子がいまだに参加していることが先生の人徳の高さを示しており、同じ教育者として羨ましく感じたことも多々あった。その時の先生の顔は言葉では言い表せない表情で溢れており、身体全体で喜びを表現されていたのが昨日のように思い出される。

先生は一昨年頃から新著の構想を話されるようになり昨年には具体的な作業に取りかかっておられた。既存の企業社会が大きく崩れはじめ、大企業解体が提唱され、また一方では企業の在り方が問われている今日、先生の著作を楽しみにしていたのはわたしひとりではなかったであろう。残念の一言につきる。お悔やみの言葉を記すのは非常に辛いですが、いまは先生のご冥福を心からお祈りする次第である。

2002年12月5日

経営学部長 宮 坂 純 一